

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成18年11月号

平成十八年十一月一日発行 第十六卷第十一号 道巻第一八五号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 唐辛子

高橋将夫

金色の蛹から生れ秋の蝶

鳴り急ぐときもありけりばつたんこ

流れ星ふとしたはづみなりしかな

入子枳出して並べる良夜かな

荒鷹の誇りまみれでありにけり  
自尊心忘れてゐたる案山子かな  
折れてゐる葉鶏頭あり抜いておく  
蜉蝣の飛んでゆきけり追ひかける  
百葉の長とくとくと望の月  
笑ふ子も泣く子もをりて花野かな  
きれいごとだけではすまぬ唐辛子

# 夏から秋へ

万城希代子

餌に群るる鯉の体臭朝ぐもり  
広島忌月のうるみてをりにけり  
山かけに山葵を効かす暑氣払ひ  
冷房車降りて眼鏡の曇る日よ  
ちりちりと髪の毛の燃えさう真炎天  
下闇にけものの匂ひありにけり  
炎天を来て六道図てふものを  
地獄絵のなまなましさを暑氣中り  
三伏の閻王口を開けしまま  
蟬時雨地獄の釜の滾るほど

## 特別作品

人間の思ひそれぞれ八月は  
刈草の匂ひ広がる旧の盆  
手を漬けて指細く映ゆ蓮の花  
暝目の黝ずむ如来夏深し  
十王の白き齒並び秋迎ふ  
新涼や山越阿弥陀来迎図  
奉納の貝に九月の波の音  
ジンジャーの花に誘はれ虫となる  
初秋や掌にのるほどの島の影  
色変へぬ松の浜辺を白馬かな

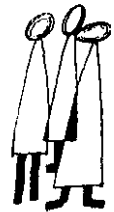
# 槐安集

## 市場基巳

山青し啼きつつも飛ぶ茅潜  
霞なき唯の浜辺を喜べり  
梅雨茸あまりに白く手にとらず  
西方へ向いて呼吸吐く屑金魚  
昨日来て今日来てやごにやる蚯蚓

## 水野恒彦

精霊や白梅雨茸だけのなれなれし  
もの書くに聴て氷ひを挽く音のして  
夏のゆめ墨書に鳥のこゑのして  
掃苔や遠山かけて雲の冷え  
はつたいや記憶の人の皆遠し



## 延広禎一

鱸子からすみ乾すあれはじやがたらお春かな  
邯鄲の声殉教の聖堂に  
海牛の恋はカラフル巴里祭  
冥王星の隠るる処暑や魔女の杖  
ただならぬ浄土の空や穴まどひ

## 加藤みき

かまつかや潮引きたる海の洞  
木の形に葛被ひをり花咲けり  
川鳥八咫鳥をり水流れ  
白桃のうぶ毛に気触れゐたりけり  
まだ強き日差しなりけり花すすき

## 石脇みはる

がむしやらの恋を捨て来し花野かな  
立秋の令法の幹にもたれをり  
くさびらの粘菌つきし掌  
畑中の瓜もぎゐたる生身魂  
みそはぎの野となり空の青さかな

石切神社

## 竹内悦子

地球丸くて向日葵に隠れゐる  
八月の雨まぎれこむ月の山  
犀の来てつぎに河馬來て施餓鬼かな  
天網や虹半分の残りゐて  
竹伐つてその日の風のゆきどころ

## 中島陽華

時計ぶつこわれ真夏のフェステバル  
トドの形の抱き枕と熱帯夜  
涼しさの座敷に喰らふ尾羽毛かな  
友がらの呉るる梅干曼陀羅華  
荔枝ころがつてをり文書がなくちや

## 栗栖恵通子

重陽の掌にあたたかき卵かな  
歩き神花火の音のかはりける  
芋の露いびつ子もなし親もなし  
萬屋の東子の上の大夕焼  
省二忌の醤油の色の落し蓋

大島翠木

それぞれの過客なるべし天の川  
晩年や遠き橋より銀河伸び  
礁越す波や八月十五日  
たひらかに盆の来てゐるマリヤの首  
物申すかに無花果を割りにけり

雨村敏子

大鯉の泡のゆくへ盆の照り  
神田に向かふおはぐる蜻蛉かな  
観自在真葛原の穴ぼこぼこ  
処暑の水貝殻濡れてをりにけり  
花野来て夜は水音に眠りける

黒田咲子

朝蟬や畳みおくもの身にまとふ  
避暑の子にタコノマクラの不思議さよ  
鶉は飛べる翼をもちて留まれる  
越瓜や日の目のあるは有り難き  
どぜう屋に青田の風がよく通り

小形さとる

鬼灯と錆の滑車が濡れてゐる  
桃ひとつ啜りをへたる山の色  
積み上げてもの皆黒き八月十五日  
臨済録ほのかに夜雲灼けぬたり  
ひいやりと薄茶と干菓子置いてゆく



本多俊子

炎天に何んの蔓やらからみたり  
つまづいて粗草<sup>あらぐさ</sup>つかむ晩夏かな  
くま蟬の朝となりたるアニミズム  
蒼々と山くつきりと魂まつり  
真直に秋の煙の立つ日かな

天野きく江

蟬の森今ビッグバンと云ふべかり  
車窓より過去を捨てたる花火かな  
八月のあぢさゐ一輪あげたくて  
鳶の空魂投げよ男郎花  
腹擦つて我が髪を過ぐ鬼蜻蜒



# 槐市集

近藤喜子

稲びかり刹那の空のずれにけり  
五体よりたましひに涼新たなり  
満天の星へ一途に下り鮎  
銀漢の煙めきハンドベルの音  
家の中へ中へと迎へ火の煙

柴田靖子

もろもろの音のみこみし蟬の穴  
遠き方ふいとどきし落し文  
あやつらるるを喜びとし荒鶉かな  
捨猫のひろわれてゆく良夜かな  
芋の葉の水玉いだく朝まだき

鈴木勢津子

あきらかに蓮の落花舞ひにけり  
咲きのぼる勢ひ出たる稲の花  
秋蝶に産卵の苦のありにけり  
残暑なる太陽系の謎めけり  
月夜茸笑つてゐたる喉仏

瀬川公馨

梅雨明の空 8 分<sup>ぶん</sup>の 6 ビート  
パストラーレパストラーレ水田べり  
炎天をてくてく歩くこと一里  
爪紅の境内外れて弾けたる  
更け更けていよよ守宮の座興かな



# 槐集

## 高橋将夫選

山幾つ越えし銀河の流れかな

岡崎

岩月優美子

桐一葉余生を語る友と居て

魂のいくつ乗りたる茄子の馬

観音の指にはじまる秋思かな

虫の音の夜の鏡に向ひをり

流星や神の寢息の乱れたる

かなかなや子供の顔が風となる

深窓の白さよ蕎麦の花月夜

山霧や茫たるものを孕みつ

渦を巻くかげらふアンドロメダ銀河

涼しさの真赤な日の出目にあふる

枚方

蟬時雨大樹の影の短さよ

天空に魂ぬけてゆく団扇かな

炎ゆる日の緑黄色の野菜籠

天塩の板ずり胡瓜生きてゐる

中野京子

近藤喜子

秋冷の扁額大ぎ飛白体

枚方

谷村幸子

男体山晴れわたりたる花野かな

甕の中に育つ菱の実大きかり

眼の玉を洗はれぬたる秋灯

霧はれし眼でみたるこの世かな

貨車が音ひきずつてゆく残暑かな

井の神に供へてありし衣被

夕星や黍吹く風と思ひをり

霧の湧き棒切杖に仙人めく

刈り残されし数珠玉の鳴りはじむ

白砂に置かれし炎ゆる鬼瓦

枚方

月光や珊瑚の島の潮だまり

胞衣塚や薄切りさるる鬼虎魚

棕櫚縄の束ねてありし合歡の花

夾竹桃大雨警報解除せり

植木戴子

近藤きくえ

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇「槐集」観照

観音の指にはじまる秋思かな 岩月優美子  
秋思は「秋になり、心に感じたり思ったりすること。(略)寂しさ、静けさ、秋のあわれなどが一体となって形づくられる感情。」(角川俳句大歳時記)。観音さまのやさしく、やわらかそうな指先に秋思を感じる作者の感性が素晴らしい。なるほど、観音さまの慈愛に満ちたお顔にも憂いがみえてくるようだ。

流星や神の寝息の乱れたる 近藤 喜子  
流星を見て、天にまします神の眠りをさまたげると心配するのはこの作者ならではのこと。それにしても、「神」「真理」「存在」は一体どこにあるのだろうか。

天空に魂ぬけてゆく団扇かな 中野 京子  
団扇で扇いでいる。よほどの暑さなのだろう。なにしろ天空に魂が抜けていくと感ずるほどだから。

霧はれし眼でみたるこの世かな 谷村 幸子  
霧の晴れた眼で見た景色は実に美しかった。そればかりか、世の中の様子までよく見えてくるようだという。術後の感慨。

貨車が音ひきずつてゆく残暑かな 近藤きくえ  
炎天下をゆく長い貨車。「音をひきずつてゆく」で焼けるよう

な暑さがひしひしと伝わってくる。

胞衣塚や薄切りさるる鬼虎魚 植木 戴子  
胞衣塚はかつて生命が誕生した証の地。それにいかめしい鬼虎魚の薄切りが配された掲句はただならぬものを感じさせる。

カサブランカの光の中の孤独かな 近藤 紀子  
カサブランカは近ごろ人気の大輪の白ユリ。私はカサブランカでモロッコの都市とイングリッド・バークマンを思い浮かべたが、作者はその花の光に孤独を感じたという。

色変へぬ松や金戒光明寺 竹中 一花  
黒谷の金戒光明寺は浄土宗の大本山。新撰組の本陣になったこともある。作者は金戒光明寺への思いを「色変へぬ松」に託した。激動の時の流れと常緑の松の取り合わせ。この種の句の観照は句の意味を深めるのではなく、句のイメージを追及することである。

東雲にバラ剪りをればイヴの影 西村 純太  
バラを剪っていたらイヴの影を見たという。ルネッサンスの絵画を見ようような景である。時間としては東の空が明らむころ。上五の東雲で、和洋融合の一句となった。

金色のピカソの胸毛さるすべり 南 一雄  
岡井省二の世界を二途に歩む作者にしては一風かわった毛色の一句。「金色のピカソの胸毛」の素材の面白さと、これに対する「さるすべり」の取り合わせがなんとも絶妙。